

**BBC**  
BE\*BOY COMICS

THE MAN CALLED "Uappa" THE MAN CALLED "Uappa" THE MAN CALLED "Uappa" THE MAN CALLED "Uappa" THE MAN CALLED "Uappa"

ツァーレ  
**皇帝と呼ばれた男・下**

NOVEL / 水上ルイ  
COMIC / 東野裕







ツァーリ  
皇帝と呼ばれた男・下  
水上ルイ／東野 裕

## CONTENTS

ツァーリ  
皇帝と呼ばれた男 COMIC  
3

ツァーリ  
皇帝と呼ばれた男 NOVEL  
100

Snow Queen Festival  
155

イゴールの優雅な日常 ~シャワー編~  
172

ツァーリ  
皇帝と呼ばれた男 ~イゴール策謀編~  
175

ツァーリ  
皇帝と呼ばれた男 ~イゴール亡命編~  
183

永遠の誓い ——Eternity  
193

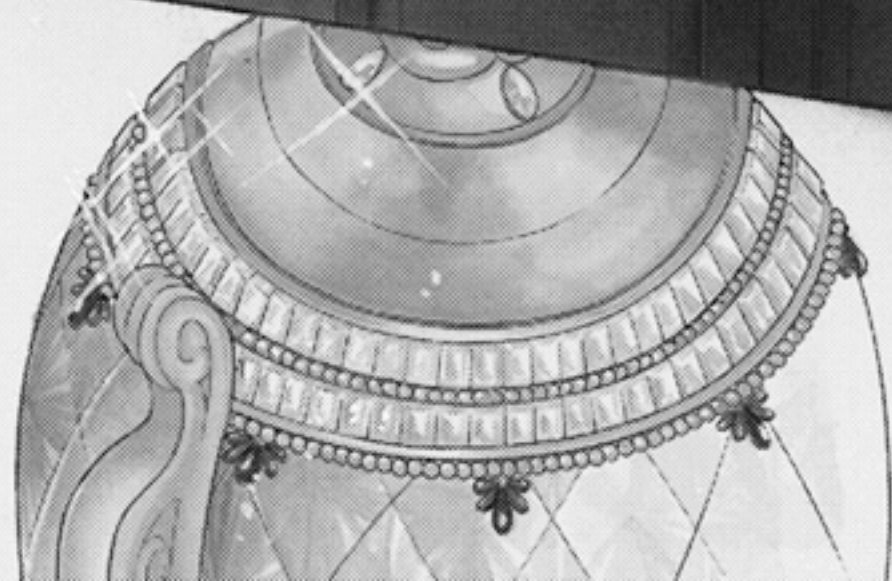
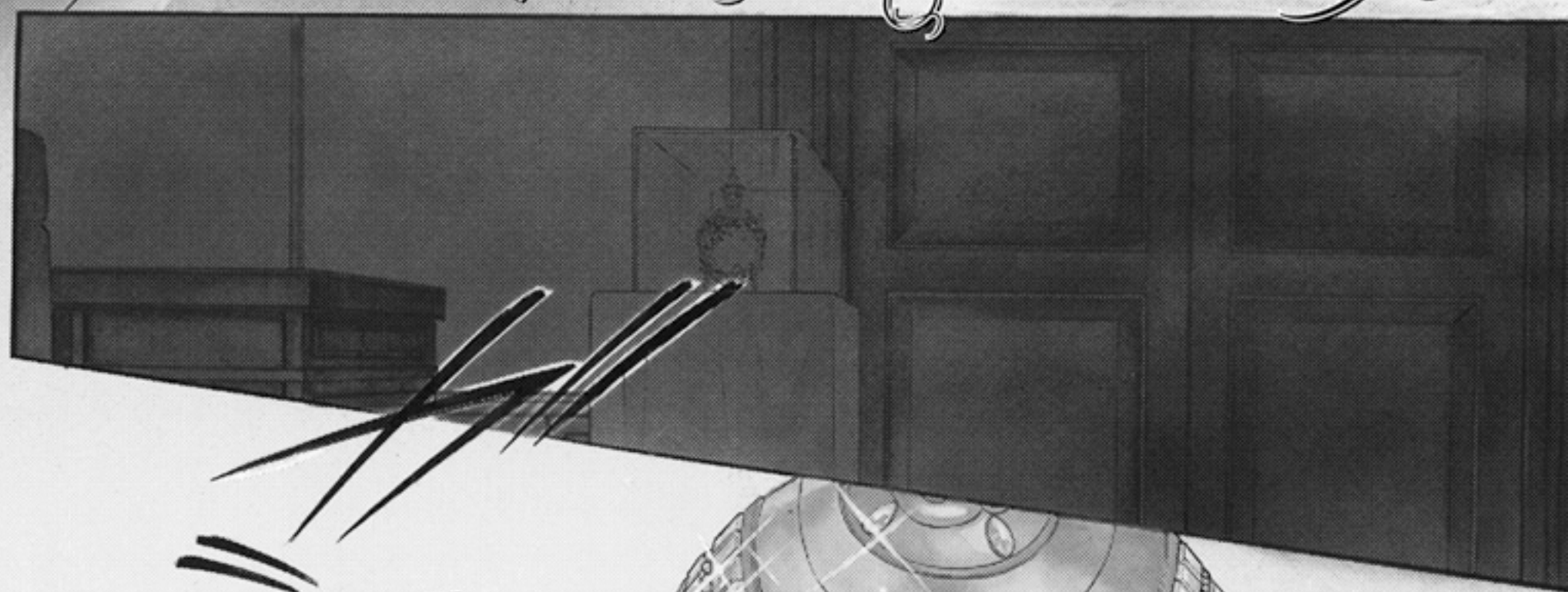
二人の慰安旅行 後編  
~日本の温泉旅館にて~  
203

Postscript  
206

“THE MAN CALLED“Царь””  
Presented by RUI MINAKAMI  
YOU HIGASHINO



# 皇帝と呼ばれた男



ビービー

ビービー

ビービー

ビービー

『ラスト・  
インペリアル・  
エッグ』が!!

!?

男に  
おとこ



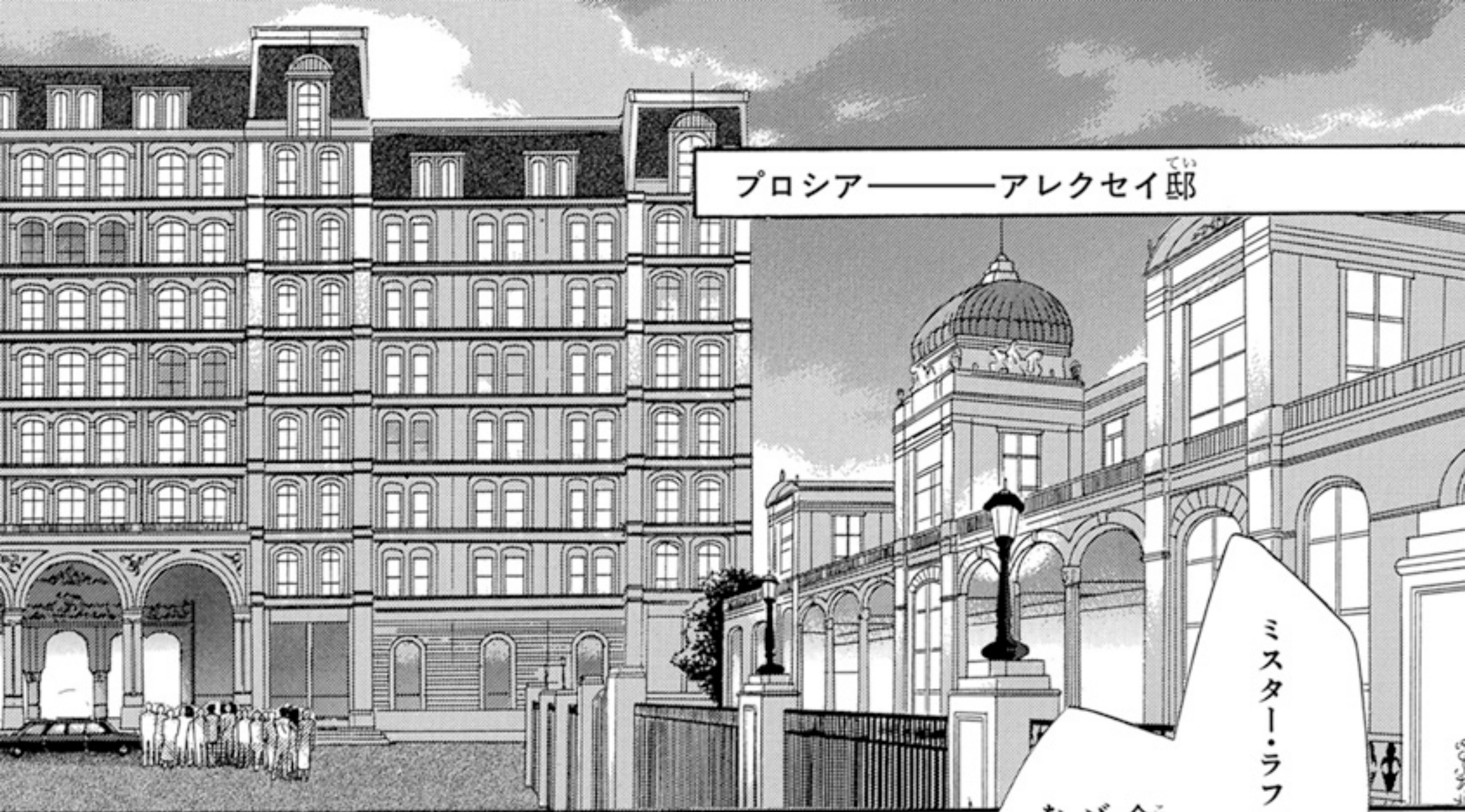
# 皇帝の母は

ツアール

よ



*Rui Minakami © You Higashino*



ミスター・ラフマニノフ！

今回現首相である  
ゾーロトフ氏と争う事と  
なりますが自信のほうは？



世論調査でも  
圧倒的にあなたへの  
支持率が上回る  
結果となりましたが

ぜひあなたを  
支持する国民に  
一言！

ラフマニノフ皇帝の息子  
であるあなたが出馬される  
事を発表されてから

世界中の政治家たちから  
あなたを支持すると  
いう声が高まっています

それについては  
どう——



す……







あの様子から見て  
「ラスト・インベリアル・エッグ」が  
盗まれたことは、まだ  
マスコミには知られていない  
ようですね



ただいま

oil interests deny health effects, and Malaysian Palm Oil Council has mounted information campaign and unwritten medical support its case. a judge 1985 that seven of in- prod- that

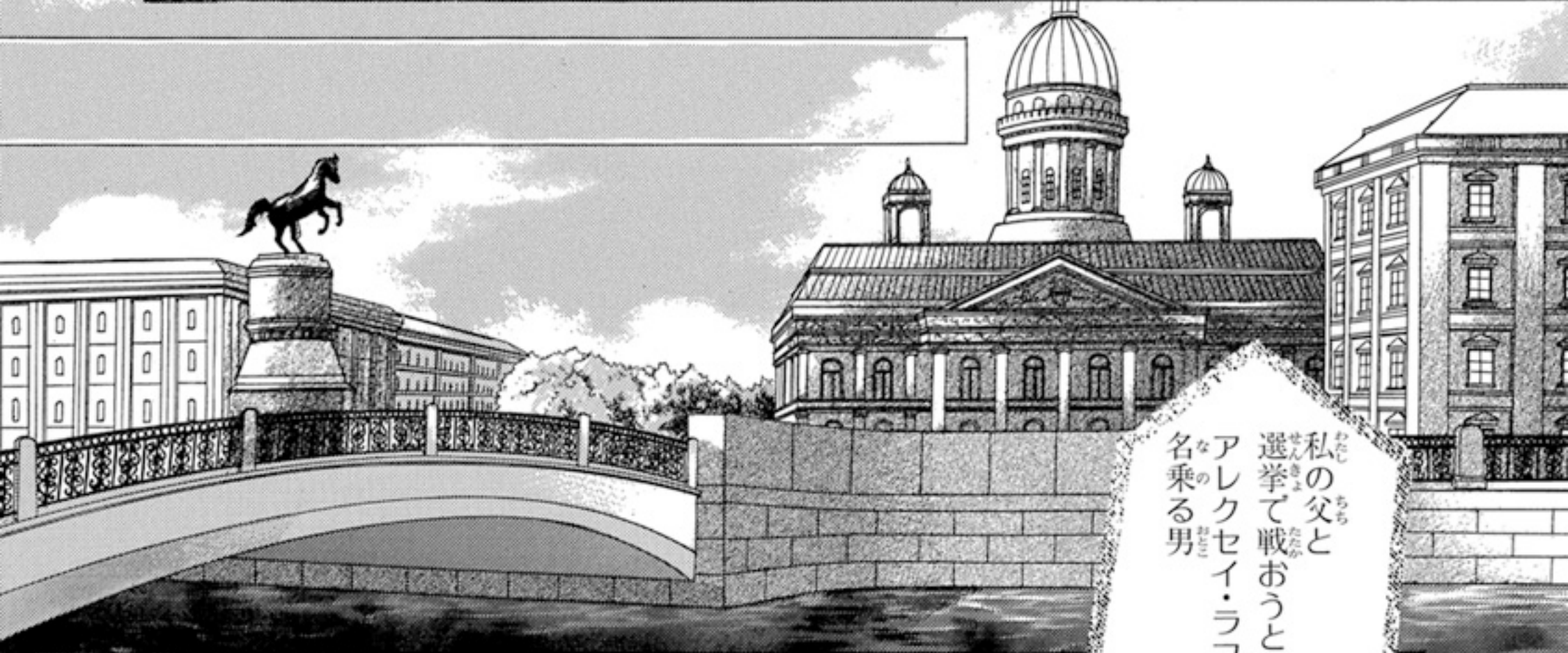
problems high interest sharp run-up in p- gle-family homes. But Cummings and S... said saturated with high blood cholesterol levels and heart United States may average about 1.84 billion pounds (840 million kg) since 1985, but the February decline represented a sharp revision from the original report world trade, and the effect on soldiers such as Malaysia the first time build- has shown such in 1981-1982.

フ朝帝・遺児の証  
パリアル・エッグ

ああ、  
混乱を避けるため、  
そして国民の信頼を  
裏切らないためにも

一刻も早くエッグを  
見つけ出さなくては





私の父と  
選挙で戦おうとしている  
アレクセイ・ラフマニノフと  
名乗る男



彼は本当の  
皇帝の遺児  
などではない

偽物です

そんな!!

しかし  
ラフマニノフ氏は  
皇帝の息子である  
証


「ラスト・インベリアル・エッグ」を  
所有していると  
言われていますか?

それは  
嘘でしょう

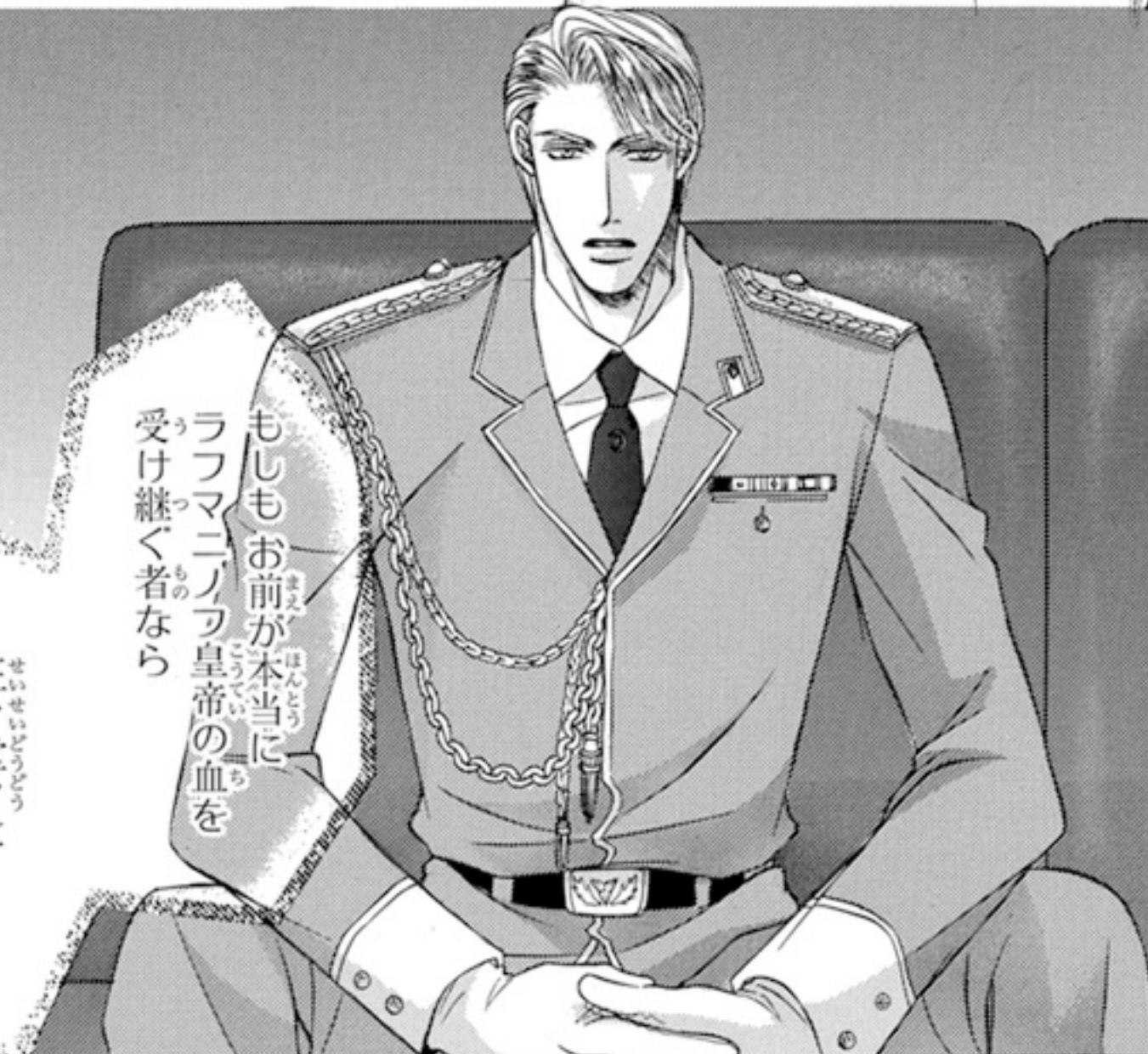
彼が本当に  
「ラスト・インベリアル・エッグ」を  
持っているというなら

我々国民の前に  
それを示し、  
そのエッグが本物であるか  
鑑定を受ける事が  
できるはずです

そのために  
「インベリアル・エッグ」  
研究の第一人者  
オーウェン・レノックス博士を  
英国から呼び寄せました




アレクセイ・  
ラフマニノフ




もしもお前が本当に  
ラフマニノフ皇帝の血を  
受け継ぐ者なら


正々堂々と  
私と勝負できる  
はずだ




一週間後の  
選挙演説の席に



お前が持つそのエッグを  
持ってくるんだ




国民の前で  
お前が偽物である事を  
証明してやる



いかにも計ったような  
タイミングだ


これでエッグを  
盗んだのが誰なのか  
はつきりしたな

どうしましょう  
アレクセイ…



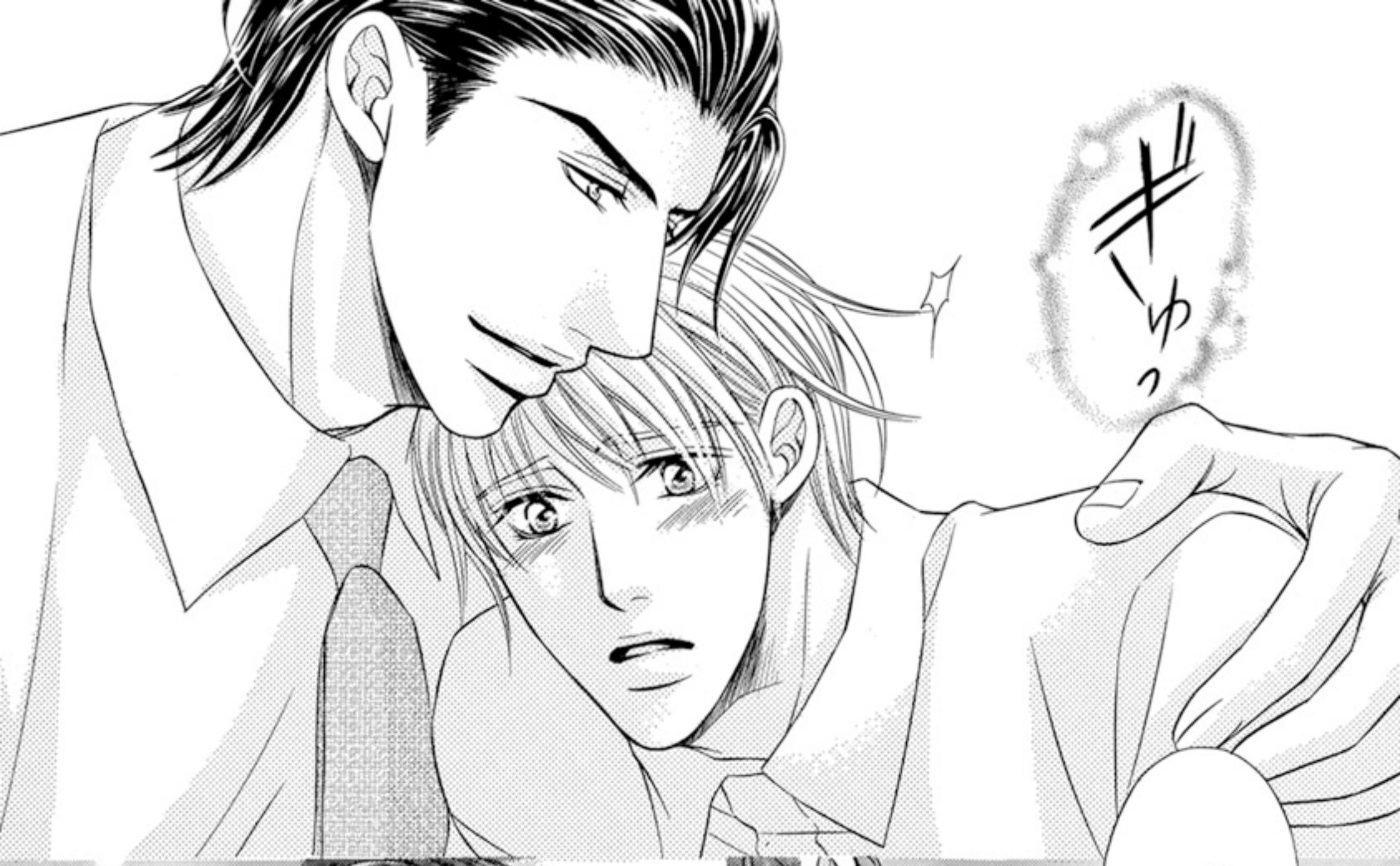
レノックス博士は  
『インペリアル・エッグ』  
研究における  
世界的な権威です

彼の証言は  
信用されてしまう



アキト…





大丈夫だ

私は  
どんな事をしても  
「ラスト・インペリアル・  
エッグ」を取り戻す

この国を  
あんな卑怯な男たちに  
渡すわけにはいかない





ミアレクセイ

君が一緒に  
いてくれれば

私は  
どんな事でも  
乗り越えられる



呼ばれた男



こうさかあきと  
香坂彰人

……なんだか、まだ夢の中の出来事みたいだけど……。

僕は、アレクセイに出会ってからの数カ月間のことを、鮮やかに思い出す。

……これは、現実のことなんだよね。

選挙戦で圧倒的勝利をおさめたアレクセイは、プロシアの首相に就任した。

CNNのニュース画面にはこのプロシアの首都・ペトロフの様子が映し出されている。

市場や広場には活気が溢れ、陰鬱だった

人々の顔には明るい笑顔が戻っている。

『このプロシアは、アレクセイ・ニコラーエヴィチ・ラフマニノフという優秀な指導者のもとで、昔の栄華を確実に取り戻しつつあります』

テレビから流れたキャスターの言葉、それを聞いた僕の心に、深い喜びが湧いてくる。

……この国に、再び平和が戻ってきて、本当によかった。

僕は改めて気づく。

……僕はいつのまにか、この国と、そしてこの国の人々を、こんなに愛していたんだ。

……そして。

画面が変わり、国会議事堂の美しい会議室が映し出される。

壇上に立ち、記者からの質問に答えている凛々しい一人の男。

逞しい肩と長い脚で、趣味のいいダークスーツをピシリと着こなしている。

まるで彫刻のように端麗な美貌。艶のある黒い髪、氷原を駆ける狼のように澄んだ光を浮かべるエメラルド色の瞳。

彼の全身を取り巻いているのは、本物の統治者に相応しい人だけが持つ、煌めく黄金色のオーラ。

……アレクセイ……。

彼を見るだけで、僕の鼓動が速くなる。

……僕は、この人をこんなにも愛してしま  
ったんだ……。

僕の名は香坂彰人。二十五歳。東京にある  
美術大学の彫金科で講師をしている。研究テ  
ーマはプロシアの皇家に代々伝わる卵形の宝  
飾品『インペリアル・エッグ』だ。

そして、彼の名前は、アレクセイ・ニコラ  
ーエヴィチ・ラフマニノフ。二十年前に革命  
によって崩壊したラフマニノフ皇家の末裔。  
世が世なら、プロシア皇帝になっていたはず  
の人だった。

彼は幼くして革命で両親を亡くし、自身も  
国外への亡命を余儀なくされた。本当はいつ  
暗殺されてもおかしくなかった彼は、し  
かしその強さと聡明さで立派に生き延びた。  
そして彼からすべてを奪い、圧政で国民を苦  
しめていたゾーロトフから、この国を奪い返  
したんだ。

……こんなに美しく、強く、そしてこんな  
に素晴らしい人が……僕の恋人だなんて。  
思うだけで、頬が熱くなる。

……なんだか、未だに信じられない。  
僕が今いるのは、アレクセイの持ち物であ  
る豪華なマンションの一室。  
大きな窓からは、ペトロフの美しい街並み

と、そして元はラフマニノフ宮殿だった、壮  
麗な国会議事堂を見下ろすことができる。

……アレクセイは、今、あそこで仕事をし  
ているんだな。

僕は窓の下を見下ろしながら、今朝のキス  
と、彼の言葉を思い出す。

『八時には執務が終わるから、その時間に合  
わせて迎えを寄越す。私が生まれ育った場所  
を、君に見て欲しいんだ』

彼の言葉を思い出して、胸が熱くなる。

選挙の前、ゾーロトフの息子・イゴールの  
毘にはまり、僕は国会議事堂の地下に監禁さ  
れた。だからエントランスホールと、そして  
皇帝が私室として使っていたという地下室だ  
けは見たけど……あの時は、ゆっくり周りを  
見る余裕なんかなかった。

鼓動を速くしながら、時計を見上げる。

……七時半だ。あと三十分もしたら迎えの  
人が来てしまう。

僕は慌てて部屋を横切り、クローゼットの  
中からアレクセイにプレゼントされたスーツ  
とワイシャツ、ネクタイを取り出す。

……執務が終わる時間とはいえ、すべての  
職員の人たちがすぐに帰るわけじゃないだろ  
う。あまりラフな格好で、国会議事堂に入る  
わけにはいかないよね。

僕は着ていたセーターを脱ぐ。緊張してし  
まいながらワイシャツに袖を通す。

プロシアは革命後ずっと軍事政権下にあっ  
た。外国人の研究者が国会議事堂に見学に入  
るなんて、きつと革命以来、二十年ぶりのこ  
と。これはすごく貴重な体験なんだ。

……それに。

アレクセイは、この国の首相としての激務  
に毎日追われている。特にこここのところ忙し  
いらしくて、帰りは夜明け近くになる。

彼は、昼間は研究に明け暮れている僕の身  
体を心配して『先に寝ていなさい』って言っ  
てくれて。僕は彼に気を遣わせないように、  
起きていても寝たふりをして。

だから、デートをするどころか、直接顔を  
合わせて話ができるのは、朝、彼が国会議事  
堂に行く前の忙しい時間だけ。

『愛してる』の言葉も『行ってきます』と『行  
ってらっしゃい』のキスも……なんだか最近  
は慌ただしくて。

……彼とゆっくり過ごすのは、すごく久し  
ぶりだ。

彼と一緒にいられる時間を思うだけで、ド  
キドキしてしまう。

『ラフマニノフ首相って、ハンサムなだけじ  
やなくてすごくセクシーよね。あんな人にな

ら抱かれてみたいわ』

いきなり聞こえてきた女性の声に、僕はハッとして我に返った。

『しかも彼、あのラフマニノフ皇家の血を引く人なんでしょう？ 彼に選ばれたら現代のシンデレラって感じじゃない？』

点けっぱなしだったテレビに目を移すと、インタビューを受けているのは、とても色っぽい、ハリウッドの人気女優だった。

マイクを持った女性レポーターが言う。

『若くてハンサムな首相の誕生は、政界だけではなくさまざまな方面に影響を及ぼしているようです』

彼女の声をバックにして、首相選の時のアレクセイの顔がアップで画面に映る。

彫刻のように完璧な美貌に浮かぶ、怒りを含んだ雄々しい表情。

獍猛に光るそのエメラルド色の瞳は……彼女が言ったとおり、不思議なほどにセクシーに見える。

美しい女優が背が高く、ハンサムなアレクセイと並んだら、さぞ見栄えがするだろう。

そう思ったら心がズキリと痛んだ。

……テレビで見るプロシアの首相のアレクセイは、恋人の彼とはまるで別人みたいだ。

僕はなんだかふいに悲しい気持ちになりな

がら思う。

……凜々しくて、本当に素敵だけど……なんだかとっても遠い。

『いったいどんな女性が彼のハートを射止め、現代のシンデレラになるのでしょうか？』

僕の心が、ズキリとまた痛んだ。

アレクセイは、一国の首相になった今でももちろん前と変わらず、僕に愛を捧げてくれている。

……けれど。

僕の心の中にある不安が、また少しずつ大きくなる。

……美しくもなく、ただ平凡で、しかも彼と同じ男である僕に、彼と並んで歩いていく権利なんか……あるのだろうか？

アレクセイ・ラフマニノフ

大階段の上からエントランスホールに下りようとしていた私は、エントランスに入ってきた人影を見て、胸を熱くする。

いかついSPに囲まれて、彼はさらに華奢に見える。

彼の身体を包むのは、私がプレゼントした純白の毛皮のコート、そしてクラシカルなラインのスーツ。

煌めくシャンデリアの明かりの下、たたず

む彼は……ふいに舞い降りた雪の精のように美しい。

降ったばかりの雪のような、透き通る肌。形のいい、小さな顎。

触れると蕩けそうな薄桃色の唇。

スツと通った、品のいい鼻筋。

緊張したように速く瞬く、長い長い睫毛。

その下の、煌めく琥珀色の瞳。

黙っていれば少し冷たく見えるほどの美貌

だが、彼の優しい性格を表して、そこに浮かぶ表情はふわりと柔らかい。

……ああ、今朝も愛を囁き合い、キスを交わした。

……なのに、こんなにも私を切なくする。

「アキト」

呼ぶと、彼はパッと目を輝かせ、こちらを見上げてきた。彼の美しい顔に、花のような笑みが浮かぶ。

「あの……こんばんは、ラフマニノフ首相」

彼の唇から漏れるのは、SPの存在を気にしているのか、堅苦しい言葉。

「お招き、ありがとうございます」

だが澄んだ声には、初々しく可愛らしい恥じらいが含まれていて……私の心をまた切なく痛ませる。

……ああ、なんて愛しい存在なんだらう。

私はSPたちに控え室に下がっているように言い、それから階段を下り、エントランスホールを横切つて彰人のもとに歩く。

建築物にとっても興味のある彰人は、エントランスホールを嬉しそうに見回す。

教会のそれのように高いエントランスホールの天井は、ゆるやかなドーム状になっていて、美しいフレスコ画が描かれている。

天井から下げられた、真鍮とクリスタルで作られた豪華なシャンデリア。

そして、美しい手すりを持つ大階段。

どれも、このプロシアにあるどんな建築物もかなわないほど、精緻で美しい。

「すごい。まさにプロシア様式の粋を集めたという感じです。こんなに素晴らしい場所で、あなたは子供時代を過ごしたんですね」

感動したように呟かれた言葉が、とても嬉しく心に響く。

「案内するよ。おいで」

私は、祭壇に上がる花嫁の手を取るようにして、彰人の手を持ち上げる。

そしてそのまま、階段に誘う。

「まず最初に、君と一緒にいきたいところがあるんだ」

興味深げに辺りを見回している彰人の肩を

抱いて階段を上がる。

柔らかな絨毯を踏んで廊下を歩き……そして一つの部屋の前で立ち止まる。

私は、ポケットから、金庫から出してきた真鍮の鍵を取り出す。

鍵には色あせた水色の房飾りがつけられ、

鍵の頭には、ラフマニノフ皇家の象徴である狼が彫られている。

「綺麗な鍵ですね……あれ？」

彰人が鍵を見て何かに気づき、クスクスと笑う。

「可愛い。ラフマニノフ皇家の紋章かと思っ

たけれど、その狼、まだ子供なんだ」

鍵の頭には、可愛らしくデフォルメされた

子供の狼の姿が彫り込んであった。

「なんだか、お茶目な……」

彰人は微笑み、それからハツとする。

「もしかして、この部屋……？」

「ここが宮殿だった頃、代々、王子の私室として使われていた部屋だ」

「ということ、あなたも……？」

「そうだよ」

私は鍵を鍵穴に入れて回す。カチリという

音を立てて、鍵が開く。

私は手を伸ばしてノブを回そうとし……そ

してふいにためらう。

この建物を追われ、父と母を殺された、あの革命の夜からずっと……私はこの部屋に戻ってきたいと切望し続けてきた。

……そしてやっと、ここまで帰ってきたんじゃないか。

……どうして、ためらうんだ？

私は、ノブを握ったままで思う。

……ゾーロトフに奪われたものを自分の手で奪い返す、そしてここに帰ってくる、私は今までその目標だけを考えようとしてきた。

……そしてずっと愛する父と母が殺されたという悲しい事実から、必死で目をそむけ続けてきた気がする。

……だが、ここを開ければ……。

……

……

……

隣に立った彰人が、敏感に何かを感じ取ったかのように呟く。

「あの革命以来、あなたがここに入るのは初めてなんですか？」

……

言い当てられた私は苦笑しながら、

「なんとなく入るのが怖いような気がした。

ここに帰ってくることをずっと待ち望んでいたのに、おかしいことだが」

「でも……その気持ちもわかります」

彰人は、どこかが痛むような声で言う。

「ここには楽しい思い出がたくさんあると同